

V + N1 + “叫” + N2 について On V+N1+jiao+N2

伊藤 大輔
Daisuke ITO

Keywords : serial verb construction, pivotal construction, head, modifier

キーワード : 連述構造, 兼語式, 主要部, 修飾語

0. はじめに

本稿において議論の対象とするのは次のような例である。

- (1) a. 朱自耕有个儿子叫朱诗尧, 在电视公司工作。
朱自耕には朱詩堯という息子がおり, テレビ関係の会社で働いている。¹⁾
b. 不过, 叶利钦也很满意, 给她起了个名字叫列娜。
しかしエリツィンは満足し, その子にエレナという名前をつけた。

下線部はいずれも V+N1+“叫”+N2²⁾ という形式からなる。一方, 意味的には N2 が N1 の名称を表し, 概ね「N2 という名の N1 を V する」という日本語に対応する。詳細な定義は第 1 節に譲るが, 概ね以上のような条件を満たす例の総称として以下「名称文」という呼称を用い, 論述の便を図ることにする。

名称文は, 朱德熙 1982 の分類に基づけば連述構造³⁾ に該当する。しかし, 同著には (1a) のような V1 が “有” からなる例を除いて名称文に当たる用例が見当たらず, (1b) のような例が連述構造のどのサブカテゴリーに属するののかという位置づけは必ずしも明らかではない。

一方, 刘月华等 2001 は次の例を “表示称谓或认定意义的兼语句” (呼称ないし認定の意味を表す兼語文⁴⁾) として挙げているが, それ以上に踏み込んだ言及は見当たらない。

- (2) 我给他起了个小名叫南南。
私は彼に南南という渾名をつけた。(刘月华等 2001:709)

以上の問題意識に基づき、本稿は名称文の実態を記述した上で、それらが理論上どのように位置づけられ得るかについて議論し、従来の理論へのフィードバックを行うことを目的とする。以下、第1節では名称文の範囲を確定し、第2節では今回収集した用例について記述する。そこで把握した実態を踏まえ、第3節では名称文に関わる理論的問題について議論する。その結論としては、名称文を兼語式と捉えた場合、それはプロトタイプ的な典型例ではなく周縁的なものとして位置づけられる点が挙げられる。ただし、それを兼語式の他の例と併せて体系的に解釈するためには、従来の説に若干の補足ないし修正の余地がある。一方、それと異なる解釈として、名称文の“叫”+N2を後置修飾語と捉えることも可能である、ということも同時に指摘する。

1. 名称文の範囲

V+N1+“叫”+N2という構成素列のすべてが本稿で議論の対象とする名称文に該当するわけではない。議論の対象が無際限に拡張することを防ぐために、ここで名称文の範囲を確定しておく。

次の例は、VとN1の組み合わせが(1b)と同じ“起了(一)个名字”であるが、このように同一のV+N1についてカンマがある例とない例の両者が存在するというケースがいくつか見つかった。

- (3) 我们给它们起了一个名字，叫“经久不衰的产品”。

それらを「ロングセラー製品」という名で呼ぶことにしよう。

カンマは音声上ポーズを表すが、連述構造や兼語式は、一般に途中ポーズが置かれないもののみ限定されることが少なくない。しかし、(1b)と(3)を同列に扱うか否か決定するのは、そもそも両者を比較対照することによって初めて可能となる。そのため、今回は“叫”の直前にカンマが置かれた(3)のような例もひとまず名称文の範疇に収め得るものと見做して収集した。

なお、“叫”の代わりに“叫做”“叫作”が用いられた例も同様に名称文としてカウントする。

- (4) a. 对爱人有一种诗意盎然的称呼，叫做“牵手”。

夫婦の同士の間、「牵手」という詩意あふれる呼び方がある。

- b. 有句话，叫作“面壁九年”。

「面壁九年」という言葉がある。

一方、形式上V+N1+“叫”+N2という構成素列であっても、N2がN1の名称であるという

関係が成立しない以下のような例は名称文から除外する。

- (5) a. 5个月, 小凤枝就会张口叫妈妈。
 まだ5か月なのに鳳は口を開けて「ママ」と呼ぶことができる。
- b. 没有妈妈叫我。
 私の名を呼んでくれる母はいない。
- c. 我替你们叫辆的士。
 ぼくがタクシーを呼んであげよう。

また、以下のような“把”（“将”を含む）構文や、Vが“管”“称”からなるV+N1+“叫”+N2も名称文から除外する。

- (6) a. 人们把上述比数叫“第二性比率”。
 人は上記の比率を「第2性別比率」と呼ぶ。
- b. 人们管它叫益虫。
 人はそれを益虫と呼ぶ。
- c. 日本女人称自己的丈夫叫“主人”，太太则叫做“女房”，很明显地表现出这是一个男尊女卑的社会。
 日本の女性は自分の夫を「主人」と呼び、一方妻は「女房」と呼ばれるが、これは男尊女卑の社会であることをはっきりと表している。

これらの例において、N2がN1の名称であるという関係は成立している。しかし、“把”“管”“称”はいずれも具体的な動作や状態を表すとは言い難く、これらのV+N1+“叫”+N2は全体で「N1の名称はN2である」という意味を表すのみである。この点において、N1の名称だけでなくN1に施される動作やN1の置かれた状態を述べて「N2という名のN1をVする」という意味を表す(1)の各例とは区別されるべきである。

さらに、以下のようにVが“是”からなるV+N1+“叫”+N2も名称文から除外することにする。

- (7) 他的第三代是个女孩, 叫圆圆。
 彼の3代目は女の子で、「円円」という。

この例においては、N2“圆圆”がN1“女孩”の名称を表しているが、同時に“他的第三代”の名称をも表している。そのため、兼語式とする解釈も可能であるが、“他的第三代”を共通の主語とする述語が2つ並列された構造であるとする解釈も可能である。そのため、N2がN1

以外の名称ではあり得ない(1)の各例とは区別されるべきである。

兼語式でなく主述構造であることが明白である例も名称文から除外する。

- (8) 别人花钱, 叫做“奢侈浪费”; 你若花钱, 只是“慷慨解囊”。

他人が金を使うのは「贅沢な無駄遣い」というが, あなた自身が金を使うのは「気前よく財布の紐を緩める」のに過ぎない。

下線部中の“奢侈浪费”は, ここでは明らかに“钱”の名称ではなく“别人花钱”全体に与えられた名称であり, 下線部は“别人花钱”を主語とする主述構造と考えるのが妥当である。

その一方, 兼語式と動賓構造の境界については状況が複雑である。三宅1994はV1+N+V2のうちV1が“知道”である例を動賓構造とする一方, V1が“喜欢”からなる例をプロトタイプから離れた周縁的な「兼語式」としているが, 同時に両者の境界は連続的であるとしている。そのため, たとえば(9c)のようにどう位置づけるかの判断が困難な例も存在する。

- (9) a. 对于后来的中国共产党人, 都知道他叫“马林”。

後世の中国共産党の人間であれば, 誰もが彼の名前が「馬林」であることを知っている。

- b. 可是, 我就是喜欢它叫过猫。

でも, 私はそれが「過猫」という名前なのが気に入っている。

- c. 相传, 武则天看到一篇叛乱者的文告, 叫《讨武曌檄》。

言い伝えによると, 武則天は反乱者による『討武曌檄』という文章を目にした。

本稿では, 三宅1994の説を受け入れつつ, 兼語式と動賓構造の線引きが恣意的になることを防ぐ観点より, (9abc)のような兼語式と動賓構造の連続体の一部に位置づけ得る例を一律名称文としてカウントした。

以上, 本稿において議論の対象とする名称文の満たすべき条件を述べた。以下では, 実際に収集された名称文の用例について記述および考察を行う。

2. 用例分析

2-1. 用例収集の方法

今回は, 北京大学中国语言学研究中心CCL语料库检索系统(网络版)⁵⁾において, 雑誌『读者』より収集されたデータのみを検索対象として設定し, そこから検索された“叫”の用例より名称文を収集した。その結果集まった名称文の総数は273例で, “叫”全体(7539例)の約3.6%を占める。

Vに現れた動詞の分布状況を表1に示す。

表1：Vの分布

V	総数	比率 (%)	V	総数	比率 (%)
有	159	58.2	当上	1	0.4
取	22	8.1	得	1	0.4
起	21	7.7	安上	1	0.4
写	10	3.7	用	1	0.4
知道	9	3.3	要求	1	0.4
改	6	2.2	了解到	1	0.4
看到	2	0.7	找到	1	0.4
出	2	0.7	梳	1	0.4
出现	2	0.7	缺少	1	0.4
生	2	0.7	为	1	0.4
定	2	0.7	买	1	0.4
刊出	1	0.4	传	1	0.4
患有	1	0.4	发表	1	0.4
看	1	0.4	发现	1	0.4
喜欢	1	0.4	编	1	0.4
吃	1	0.4	缠	1	0.4
遇到	1	0.4	见到	1	0.4
开创	1	0.4	规定	1	0.4
写成	1	0.4	认识	1	0.4
出版	1	0.4	记起	1	0.4
信	1	0.4	设立	1	0.4
成为	1	0.4	试用	1	0.4
想到	1	0.4	说	1	0.4
送	1	0.4			
			合計	273	100.0

詳細については以下で順を追って記述する。

2-2. 具体例の分析

2-2-1. “有”

Vが“有”からなる用例は、今回見つかった名称文の約58%を占め、数の上で他を大きく引き離している。

(10) a. 曼谷有一条马路叫耀华力街，也是人们所称的华人街。

バンコクにヤオワラートという通りがあり、チャイナタウンとも呼ばれている。

b. 两千多年前中国有一位思想家叫做庄子，他有一段故事对我产生的影响非常深远。

2000年以上昔の中国に莊子という思想家がいたが、彼のあるエピソードが私に深い影響を与えた。

- c. 民间有句谚语，叫做“早饭饱，午饭好，晚饭少”。
「朝はお腹一杯に，昼は豪勢に，夜は少なく」ということわざが民間に広まっている。
- d. 二战期间，我有个绰号叫“炮弹”。
第2次大戦中，私には「爆弾」という渾名があった。

N1には人やもの，場所などを表す名詞の他，(10c)の“谚语”や(10d)の“绰号”，さらに“俗话”“称呼”“口头禅”といった言語活動に関わる名詞が目立つ。

2-2-2. “取”“起”

Vとして“有”の次に多く見られたのは“取”および“起”である。両者は用例数がほぼ同じであるが，他に1つ顕著な共通点がある。それは，N1が例外なく“名字”またはその類義語（ないし下位語）であるという点である。

- (11) a. 有人给他们取了个名子，叫“阻碍文化发展同盟”。
彼らを「文化發展阻害同盟」という名づけた人がいる。
- b. 我给他取了个小名，叫“天天”，以示当母亲与当老子的曾经日子难熬。
母と父がかつて苦しい日々を送ったことを示すため，私はその子に「天天」という渾名をつけた。
- c. 夏公养了一只猫，却给它起了个名字叫“老鼠”。
夏公は猫を1匹飼っていたが，なぜか「ねずみ」という名前をつけていた。
- d. 港台地区给此类访谈节目起了个悦耳的译名，叫作“脱口秀”
香港・台湾地区ではこの手のインタビュー番組に「トークショー」という聞こえのいい翻訳名をつけた。

N1としては他に“译名”“洋名”“绰号”などもあるが，“取”22例および“起”21例のすべてにおいてNはこうした“名字”の類義語であった。

また，“取名叫”“起名叫”という形式が多く見られた点も特記に値する。

- (12) a. 正好李瓶儿又生了一个儿子，便取名叫官哥儿。
ちょうど李瓶児がまたひとり子を産んだので「官哥児」と名付けた。
- b. 儿子出生后，为了让他记住大山，夫妻俩给他起名叫“林林”。
息子が生まれると，雄大な山のことを忘れさせないように「林林」と名付けた。

“取名叫”は13例、また“起名叫”は7例であった。『現代汉语词典（第六版）』（商务印书馆）に“起名（儿）”が動詞として収録されている事実に鑑みると、これらは語彙化の過程にある一種の慣用表現と考えるのが妥当かもしれない。

2-2-3. “写”

Vが“写”からなる用例は次のようなものである。

- (13) a. 1916年8月23日胡适写了首诗叫《朋友》，据说是我国第一首白话诗，发表于1917年2月号《新青年》杂志上，诗题改为《蝴蝶》：
1916年8月23日に胡適は「朋友」という詩を書いた。これは我が国初の白話詩であると言われているが、『新青年』の1917年2月号に発表される際には題名が「胡蝶」に改められた。
- b. 散文家董桥先生写过一篇文章，叫《凯恩斯的手》。
散文家の董橋氏は「ケインズの手」という文章を書いている。

N1はこの他“书”“小说”などすべて何らかの著作を表す名詞であり、N2はそれらの作品名を表している。

2-2-4. 出現を表す動詞

用例が比較的少ない残りのVに目を移すと、それらは概ね2つのグループに分けることが可能である。そのうちの1つ目は、「何かが出現する」という意味を表す動詞からなる一群である。

- (14) a. 一天课堂上，我出了一个题目，叫做“我最幸福的时刻”。
ある日の授業中、私は「幸せなとき」という題を出した。
- b. 3年前，我生了个女儿叫均连。
3年前、私は均連という娘を産んだ。
- c. 本刊1987年第12期曾刊出过一篇文章，叫做《母亲的情怀》，介绍女工康忠琦代子上学的事。
本誌は1987年の第12号に「母の愛」という文章を掲載し、康忠琦という女工が我が子に代わって学校に通う物語を紹介した。
- d. 进入中学那会儿，电视台新设立一个选拔人材的节目，叫“歌星诞生”。
中学に入ったころ、テレビ局が「スター誕生」というオーディション番組を新たに作った。

これらのVは、いずれもその結果としてそれまで存在しなかった対象が出現するという意味を表している。用例は割愛するが、その他“編”“定”“发表”“出现”“成为”“出版”などについても同様のことが言える。また、出現の意味を若干広く捉え、「元々存在した対象がある人物の許に出現する」という意味までも含むものと考えれば、獲得や授与を表す動詞もこの一群に含めることができる。

- (15) a. 因故得个挨贬的绰号叫做：苏七块。

そのせいで「蘇七塊」という不名誉な渾名を手にした。

- b. 对于这样的生活，我们往往找到一个美丽的代名词，叫做“深刻”。

このような生活に対し、我々は「深奥」という美しい代名詞をよく見つけ出す。

- c. 我五岁时，父亲给我买了一只黄毛小狗，叫提比。

5歳のとき、父は私に茶色い毛の子犬を買ってくれ、ティッピーと名付けた。

- d. 人们给他送了一个绰号叫“霍大力士”。

人々は彼に「霍大力士」という渾名を贈った。

既に見た“取”“起”および“写”についても、それらの例が名称や作品の出現を表しているという点より、この一群と同類であると言って差支えない。

2-2-5. 心理活動を表す動詞

グループの2つ目は、心理活動を表す動詞からなる一群である。

- (16) a. 一路同行中，我知道了她叫劳拉，还得知她的公寓距我在格林威治村的大学宿舍仅两个街区之遥。

道すがら、私は彼女の名前がローラだと知り、彼女のアパートが私のグリニッジビレッジの大学寮から2ブロックしか離れていないということも知った。

- b. 当代我国各地的饭馆里或宴会上，经常可以见到一道名菜叫做“红烧活鱼”。

現代において我が国各地のレストランや宴会の席で「紅焼活魚」という有名な料理を目にすることができる。

これらは、先に(9)で指摘した兼語式と動賓構造との境界的な用例に当たるものであり、Vの賓語がN1であると捉えるかそれともN1+V全体であると捉えるか、判断に迷うような例が少なくない。これらの他、“想到”“发现”“认识”“记起”なども類似の状況にある。

3. 考察

3-1. 存在と出現

第2節では、用例の多いものから順に、Vがそれぞれ“有”、“取”および“起”、“写”、そして出現を表すその他の動詞からなる例について紹介した。そのうち“取”“起”“写”は、その他の動詞と共に出現を表す一群にまとめ得るということを経に述べたが、ここではそれらと“有”の例の関係について考えてみる。

出現という概念は、非存在から存在への変化と捉え直すことが可能である。この点において、存在と出現という概念は密接に関わっている。また、出現した対象は出現したその瞬間からそこに存在するわけであり、その意味において出現は存在を含意するということもできる。すなわち、“起了个名字叫“老鼠”（「ねずみ」という名前をつけていた）”は“有个名字叫“老鼠””を必然的に伴っている。以上のように捉えると、“有”と出現を表す動詞は、いずれも存在を表す一群というさらに上位のカテゴリーに帰属させることが可能になる。

3-2. 兼語式としてのステイタスの再考

三宅1994は、次の(17a)を兼語式のプロトタイプとし、(17b-d)は下に行くに連れて兼語式としては周縁的な例となり、動賓構造である(17e)に近い性質を持つようになるとしている。

- (17) a. 催他去理发
散髮屋に行くよう彼をせきたてる
- b. 科长吩咐他今天把这项工作干完
課長は彼に今日じゅうにその仕事を仕上げるように言い付けた
- c. 爱她聪明
彼が賢いのが好きだ
- d. 你还记得咱们在颐和园划船吗？
私たちが頤和園で舟を漕いだのをまだ覚えていますか
- e. 我觉得你应该去学航海
あなたは航海を学びに行くべきだと私は思う

(三宅1994: 51-53, 日本語訳は原文)

このような位置づけの根拠とされているのは、第1動詞と第2動詞の意味的關係である。概略は以下の通りである。まず(17a)および(17b)においては、第1動詞と第2動詞の表す動作の間に因果關係、より具体的には後者を目的として前者が行われるという關係にあり、同時にまた、前者の表す行為が後者のそれに先立つという時間軸上の前後關係も存在する。一方

(17c) は、第2動詞の表す動作や状態が原因で第1動詞の表す感情(愛憎)が起こる、という因果関係で、時間軸上では(17ab)とは逆に第2動詞が第1動詞に先立つ。(17de)になると、2つの動詞の間にはそもそも因果関係が存在しない。

以上の枠組みに従った場合、本稿のテーマである名称文はどのように位置づけることができるであろうか。

上で見た名称文は、そもそもVと“叫”との間に因果関係が存在するとは言い難い。まず、Vが存在を表す動詞(“有”または出現を表す動詞)からなる場合は、いずれも「ある対象が存在する」ことと、同時に「その対象がある名称を持つ」ことを述べているのであり、名称を持つという目的のために存在しているわけでもないし、名称を持つことが原因となって存在しているわけでもない。一方、心理活動を表す動詞は上述のように一枚岩でないわけであるが、それでもやはり名称を持つことを目的として心理活動を行うわけでもないし、名称を持つことが原因で心理活動を行うわけでもない、ということは少なくとも指摘できる。

以上より導かれるのは、名称文が兼語式のプロトタイプから離れた(17d)または(17e)に類する周縁的位置を占めるという結論である。ただし、“取”は述賓動詞⁶⁾とは捉え難い(“取”するのはあくまで“名字”であって“名字叫〜”という事象とは考えられない)ため、“觉得”のような典型的な述賓動詞と同列に扱うのは困難である。したがって、名称文を(17)の諸例などと併せて体系的に解釈するためには、三宅1994の結論に若干の補足ないし修正が必要である。

3-3. 後置修飾語との関連

ここでは、3-2における議論とはまったく異なる解釈の可能性について探る。

荒川2003は、中国語の中で「後ろから前を修飾していると考えざるをえ」ない例として以下を挙げる。

- (18) a. 我们还有很多事要做。
わたしたちはまだたくさんすることがある。
- b. 我有几个问题想问问你。
わたしは君に聞きたいことがいくつかある。

(以上荒川2003: 54, 日本語訳は原文)

また、伊藤2016はV1+N+V2という構成素列のうち「主要部であるNをV2が修飾することによりN+V2が構成素をなす」と「解釈し得る、あるいは解釈せざるを得ない」例として以下を挙げる。

- (19) a. 缺饭吃

食う飯に事欠く

- b. 需要刀子切
切るためのナイフを必要とする
- c. 放弃机会体验
体験するチャンスを手放す

(以上伊藤2016:199, 日本語訳は引用者)

ただし、荒川2003と伊藤2016のいずれにも「修飾語が主要部に先行する」という従来のオーソドックスな文法体系における原則を覆そうという趣旨はない。部分的に「主要部が修飾語に先行する」後置修飾語のパターンを認めないと解釈困難な例があることを指摘する、という立場である。控えめな立場を取らざるを得ない理由として考えられるのは、後置修飾語が現れるのがV1+N+V2という形式のみに限られているということである。仮に、Vが後置修飾語としてNを修飾するN+Vという名詞性の構成素が、主語や述語など名詞フレーズが立ち得るあらゆる位置に立ち得るのであれば、後置修飾語を一般的な文成分として積極的に認めるのが妥当であるが、V1+N+V2というパターンにおいてしか認められないのであれば妥当であるとは言えない。

以上の問題と関連して、これまでに見つかったものはわずかであるが、興味深い例が存在する。

- (20) a. “人惟求旧，器惟求新”，据《尚书·盘庚》记载，是一位“古贤”叫迟任说的，可见它是相当古老的教条了。

「人は惟旧なるを求め，器は惟新たなるを求む」とは、『尚書・盤庚』の記載によると遅任という古賢が言ったもので，それが相当歴史の古いドグマであることがわかる。(『读书』)

- b. 有一个夏天，北京的作家叫莫言的去新疆，突然给我发了电报，让我去西安火车站接他，(以下略)

ある年の夏，莫言という北京の作家が新疆に行くに当たり，突然私に電報を寄越して西安駅に彼を迎えに行くよう言った。

(20a)の下線部に注目されたい。下線部は“说”に対する主語に立っており，さらに下線部の内部を見ると“叫迟任”が“一位“古贤””を後ろから修飾していると捉えることができる。すなわち，これはVが後置修飾語としてNを修飾するN+Vという名詞性の構成素がV1+N+V2ではなく動詞述語文の主語の位置に立った例であると考え得るのである。同様に，(20b)の下線部も“去新疆”に対する主語であり，その内部は“叫莫言的”が“北京的作家”を後ろから修飾する構造と捉えることができる。これらは，後置修飾語がV1+N+V2を超えた一般性を持ち得る可能性を微かにではあるが示唆する例として興味深い。わずかな例を針小

棒大に扱うことは厳に慎まなければならないが、同時に従来理論があらゆる例をカバーできているか点検しフィードバックする姿勢が不可欠なものも疑いない。

以上のような実態を鑑みて後置修飾語の存在を積極的に認めた場合、本稿のテーマである名称文にもその解釈が適応可能である。その場合、名称文の捉え方は3-2とは根本的に異なる様相を呈することになる。

- (21) a. 曼谷有 [[一条马路] [叫耀华力街]]⁷⁾
 b. 起了 [[个名字] [叫“老鼠”]]
 c. 写了 [[首诗] [叫《朋友》]]
 d. 生了 [[个女儿] [叫均连]]
 e. 见到 [[一道名菜] [叫做“红烧活鱼”]]

[] の内部はいずれも構成素をなす。[[名詞句] [動詞句]] という構造を持ち、全体で後置修飾語を含んだ名詞句と解釈される。(21)には存在を表す例と心理活動を表す例の両者が含まれているが、後置修飾語を認める立場に立てば、様々な例に対しこのように一貫した解釈が可能となる。ただし、既に見た通り心理活動を表す例の中には述賓動詞からなるものも散見され、それらについても一律に(21)の解釈を適用すべきか否かという問題は残る。

【注】

- 1) 本稿で挙げる用例のうち、特に注記がないものはすべて第2節に挙げた調査の際に収集されたものである。なお、以下日本語訳は特に注記がなければすべて引用者(伊藤)による。
- 2) 便宜上N2としているが、N2の位置に現れるN1の名称が名詞性成分であるとは限らない。今回はN2が名詞性成分でない場合も第1節の条件を満たせば名称文としてカウントしている。
- 3) 連述構造とは朱徳熙1982の挙げる“连谓结构”の訳であり、「述詞(動詞と形容詞の総称)ないし述詞構造の連用された形式」(同160)と定義される。英語ではserial verb constructionと称される。一般的には、接続詞や副詞等を介することなく複数の述詞構造が隣接したもののみを指すことが多い。
- 4) 兼語文とは“兼语句”の訳であり、兼語式とも呼ばれる(本稿では以下こちらを採用する)。刘月华等2001では「動賓フレーズ(動詞+目的語)と主述フレーズが1つにまとめられたもので、動賓フレーズの賓語(目的語)が主述フレーズの主語を兼ねているもの」(同708)と定義づけられている。英語ではpivotal constructionと称される。ただし、兼語式というものを独立した形式として認めるか否かについては従来より議論がある。たとえば、朱徳熙1982は動賓フレーズの賓語が主述フレーズの主語を兼ねるという捉え方を退け、他研究で兼語式とされた例を一律連述構造として扱っている。
- 5) http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/
- 6) “觉得(思う)“记得(覚えている)等、動詞性のフレーズを賓語とする動詞を指す。
- 7) “一条 [[马路] [叫耀华力街]]”とする解釈も可能であるが、ここではどちらの解釈が妥当かという議論には立ち入らない。(21bcde)についても同様。

【参考文献】

- 荒川清秀2003.『一步すすんだ中国語文法』。東京：大修館書店。
- 伊藤大輔2015.「V1+N+V2の下位分類—修飾構造・動賓構造と連動構造の境界—」,『中国語教育』第13号：75-95頁。
- 伊藤大輔2016.「中国語の後置修飾構造について」,『目白大学人文学研究』第12号：191-203頁。
- 三宅登之1994.「「兼語式」のプロトタイプ」,『中国語学』第241号：49-58頁。
- 高増霞2006.『現代汉语连动式的语法化视角』。北京：中国档案出版社。
- 刘月华等2001.『实用现代汉语语法（增订本）』。北京：商务印书馆。
- 王力1985/2014.『中国现代语法』。北京：中华书局。
- 杨成凯2000.「连动式研究」,中国语文杂志社编『语法研究和探索（九）』：106-121頁。北京：商务印书馆。
- 袁毓林・李湘・曹宏・王健2009.「“有”字句的情景语义分析」,『世界汉语教学』2009年第3期：291-307。
- 张伯江2000.「汉语连动式的及物性解释」,中国语文杂志社编『语法研究和探索（九）』：129-141頁。北京：商务印书馆。
- 朱德熙1982.『语法讲义』。北京：商务印书馆。
- 邹韶华・张俊平2000.「试论动词连用的中心」,中国语文杂志社编『语法研究和探索（九）』：122-128頁。北京：商务印书馆。
- Li, C. N. and S. A. Thompson. 1981. Mandarin Chinese — A Functional Reference Grammar. Berkeley: University of California Press.

(平成29年2月7日受理)